筋肉、或いはガチムチ
サンプル

レイアウトはめちゃくちゃです。
10 話分、60 ページくらいあります。
無断転載や再配布はしないでください。

第一話『ハメられたガチムチリーマン』

モブ強盗複数×正義感が強いガチムチリーマン

複数・むりやり・快楽堕ち

五人組の覆面強盗が店舗事務所に押し入ったのは、閉店後、社員が退店する寸前のことだった。事務所に残っていたのは店長の安藤と、副店長の山下、経理の女性社員、それから外商部門の嘱託職員2名だけだった。

既に全ての売上は銀行の夜間金庫に預けたあとで、店には一円も残っていないとわかると、強盗たちは若い女性社員に目をつけた。怯える彼女を後ろ手に庇い、安藤は一歩前に踏み出した。

「部下には手を出さないでもらいたい。俺が代わりになる」

堂々と言い放つ店長を、強盗たちは上から下まで舐めるように見てこう言った。

「いいだろう。ただし、あんたが堕ちる無様な姿をみんなに見てもらうぞ」

何のことか判然としなかったものの、学生時代からアメフトで鍛えてきた安藤は多少の痛みや苦しみには耐えられる自信があった。見れば、強盗達はみんな自分より小柄である。

いざとなればなんとかできると考えた。
リーダー格らしい男が、デスクから引っ張り出した椅子を安藤の目の前に据えた。
「じゃあ、服脱いで。パンツは履いたままがいい」
「……。」
従わなければ無理やり脱がされるだろう。大したことではない。平然とした様子で服を脱ぐ安藤を、強盗たちは含み笑いで眺めている。そのニヤけ面に腹が立ったが、大人しく指示に従った。
その間に、部下たちは結束テープでぐるぐる巻きにされ、猿轡を噛まされて床に転がされてしまった。
「あんたはここに座れ。椅子ごと縛らせてもらう」
「…わかった」
椅子に座ると、即座に男たちは後ろ手にした安藤の両手を結束テープで戒め、厚い胸筋を挟むように鎖骨と肋に粘着テープが巻かれた。背もたれに体を固定されて、動けなくなる。
「いい体してんね、オッサン」
強調された安藤の筋肉質な胸を揉んで、リーダー格の男がニヤけた。軽薄な、それでい

て執拗な手つきで、きゅむっと安藤の乳首を摘む。
「んッ…」
「これから安藤さんは、俺らにこーゆうことされるんだよ」
乳首をカリカリとひっかかれて、安藤は身動ぎした。ギシギシと椅子が軋む。
想定外の状況に安藤は動揺を隠しきれない。まさか自分が性的な対象にされるとは思ってもいなかった。しかも強盗たちの股間はすでに膨らんでいる。
「部下を守るためにケツ堕ちするガチムチ上司とか、堪んないっす」
「あッ…！？」
いきなり男が乳首に吸いついてきた。驚いた安藤の股ぐらを別の男がぐいと開く。
「な、なにする…っ？！」
「指マンしながら、しゃぶらせてくださいよー♡」
丸太のような逞しい安藤の太腿をすりすりと撫でさすりながら男は脚の間にしゃがみこみ、ボクサーブリーフ越しにはむっと安藤のペニスをくわえた。唇でやわやわと竿を食む。
「んお…ッ」
安藤は声を上げてしまった。妻とは何年もセックスレスだし、最後に自慰をしたのもいつだったか思い出せない。長い間、性的な刺激に飢えていた安藤のペニスは、淡い刺激に

も簡単に反応した。ボクサーブリーフを押し上げるくっきりとしたオスの形と、その先端から滲んだシミを確認して、男たちはわらった。
「…もう我慢汁出てますね♡」
「ち、違うっ…」
「そういう頑固なところも男らしくていいですねー♡すげータイプです♡」
「うあぁ…ッ！？」
下着を押し下げると、勃起したペニスが飛び出した。大柄な体躯によく似合う立派なイチモツだ。逞しい太腿の間でそそり立つソレを、部下たちの視線がねっとりとオカすように見つめている。
ビクンッと震え、グンッと硬くなった。
安藤には少し被虐的な性癖があった。それを周りに隠し、取り繕うために、より男らしくあるよう振舞ってきた自覚がある。
「見られて感じるんすか？」
「…っ、これはただの生理反応だッ…！」
「そうなんですねー。じゃあ、安藤さんのちんぽに直接聞いてみますねー♡」
「んほおッ…♡」

陰茎の根元を掴み、裏筋を可愛がられて、ますます硬くなっていく。根元を弄られてぷるぷると揺れる先端から透明な体液がトロトロと溢れる様子をスマホのカメラが捉えている。
「や、やめろッ…！撮るなッ…！」
「いいすねえ。もっと抵抗してみてくださいよ〜。そのほうが高く売れるんで」
「なんだと…？！」
「そろそろ目隠しますねー♡」
「アッ…」
抵抗も虚しく、目隠しをされてしまった。視界を奪われたせいで、感覚が過敏になってしまう。
いきなり生暖かくぬるぬるした何か——恐らく男の舌が、亀頭を舐めた。ちゅぱちゅぱと吸ったり、舌で弄ぶようにれろれろと舐め回され、ピクンッとペニスが反応してしまう。
「おおッ…♡お…ッ♡」
陰茎を舐めていた舌が、裏筋を舐め下ろしてさらにその奥へと進んできた。椅子に浅く座らされると、後ろから両足首を高く掴みあげられてしまう。剥き出しにされたむっちりとした尻たぶを、誰かの指が横に割り開いた。

「な、なにを…ッ？！」

他人の濡れた呼気が尻の谷間に触れたかと思うと、ぢゅるるっと勢い良く吸われた。次いで、尖った舌にちゅぽちゅぽと肉ひだを嬲られる。

「あ…ッ♡うぅ…ッ♡ふ、うン…ッ？！♡」

耳を汚す卑猥な水音に被虐心が刺激される。勃起したペニスを弄られながら、尻穴を舐められて、かつて覚えたことのない種類の快楽を身体の奥から引きずり出される。その屈辱に負けるまいと、安藤は歯を食いしばった。

第二話『ハメられたガチムチリーマン二～因縁のケツイキ天国』

大学時代の後輩 × ガチムチ既婚リーマン

ガチムチ × ガチムチ・羞恥プレイ・NTR・快楽堕ち

あれ以来、何もかも上手くいかなくなった。店舗を強盗に襲われてから、人生が変わった。

（いや、終わったと言うべきか……）

一人で暮らす安アパートの散らかった部屋を脳裏に思い描き、それまで戸建てで妻と娘と暮らしていた日々との差に、ため息をついた。

かつて安藤は、とある小売店の店長を任されていた。忙しくも充実した毎日で、それなりに満足していた。しかしある晩、閉店後に五人組の強盗に襲われたのだ。金だけでは飽き足らず、彼らは安藤の肉体をも陵辱した。

アメフトで鍛え上げた肉体を男たちに便所のように使われ、アナルで何度もイカされて、安藤の男としてのプライドはずたずたに引き裂かれた。男は男らしくという古風な考えがあったから、尚更心はポッキリと折れた。

その後、犯人たちは捕まり、一部始終を見ていた部下たちは口外しないと約束してくれた。ずっとそれは守られていたし、態度も以前と変わらなかった。しかし表面的には同じようでいて、安藤を見る目が変わった気がした。

（――知っているのだ）

安藤が、強盗たちに犯され、最後は喘ぎ声をあげて悦んでいたことを。

被害妄想だと言われたが、理屈ではわかっていても、なかなか折り合いがつけられない。

堪らなくなって、異動願いを出した。急な地方への転勤へ妻子を伴わなかったのは、もともと夫婦の仲が冷めていたことと、こんな理由で娘を転園させるのは可哀想だと思った

からだ。
なにより、安藤自身が少し離れたいと願った。
（合わせる顔がない……）
あれ以来、安藤は尻をいじらないと快感を得られない。心と裏腹に肉体だけ気持ちいいということはこんなにもみじめなのだと初めて知った。
こんな気持ちだったのか、とかつて大学アメフトをしていてときに犯した後輩のことを思い出した。
当時のアメフト部は完全な縦社会で、先輩の命令は絶対であり、従わない者は徹底的に虐め抜かれた。虐めの内容は残酷だ。性的なものも多く、安藤も一年生のときに理不尽な理由で先輩のものをしゃぶらされたことがある。
自分はそういうことをするまいと思っていたのに、上級生になると周りの空気に流されて、それまでされていたことを、自分も下級生にした。
おしゃぶりだけではない。
一人、どうしても生意気な後輩がひとりいて、ソイツを〝わからせてやろう〟ということになった。
部室に呼び出して、逆らえば他の一年に同じことをするといって、数人で犯した。最初

は嫌がっていた後輩が、そのうち女のように喘ぐようになった。涙を流して、いやだいやだと言いながら。

思い出さないようにしていた自分の過ちを、こんな形で突きつけられるとは、想像していなかった。

異動先の取引先に、その後輩がいたのだ。

歳はとったが、アメフトで鍛えた体つきと少しアンバランスなかわいい笑顔は、変わらない。営業マンをしているらしい。

「安藤先輩？そうですよね～。やっぱり名前見てそうじゃないかと思ったんですよ！」

「……えっ。あぁ、ご、ご無沙汰しています」

「そんな他人行儀な！同じ釜のメシを食った仲間ってヤツじゃないすか」

森田の明るい笑顔を見て、安堵したことを覚えている。当時のアメフト部は狂っていたし、彼をヤッたのは安藤だけではない。それで罪が薄まるわけではないが、彼の記憶に自分はそれほど残っていないのではないか、と思った。

森田はかつて安藤の店舗に強盗が入ったことを知っていた。それで転勤したこともなんとなく察したようで、ある日、仕事上がりに焼き鳥屋で一緒にメシを食いながら、いつか

また東京に戻れますよ、なんて慰めてくれた。
自分の肩を安心させるように叩く、分厚い手。久しぶりの人の温もりとごく親しく軽い口調が嬉しく、気の弱っていた安藤は涙した。
すっかり安心して、森田を信頼し、友人のように心を許していた。
だから、営業時間中にふと呼び出されて、店舗奥のロッカールームに入ったとき、森田の見せたスマホから聞こえてくるそれが誰の何の声なのか一瞬、わからなかった。

『おおっ♡おんっ♡……おおぉ……お……♡っおぉ……♡気持ちいィ……ッ♡イクッ……♡イクゥ……ッ♡』

そのハメ撮りは、首から上は映っていないが、逞しい胸の左下に黒子がある。それに野太い喘ぎ声は、安藤そのものだ。
一気に血の気が引いた。
森田はニコニコしながら、
「これ、安藤先輩ですよね」
と、画面をタップして巻き戻した。応接室で強盗に尻穴を突かれながら、潮を噴く様子が

繰り返される。

『おおっ♡おんっ♡……おおぉ……お……♡っおぉ……♡気持ちいィ……ッ♡イクッ……♡イクゥ……ッ♡』

飛び散った体液が画面を濡らし、滴り落ちた。

「潮噴くなんて、強盗のデカマラにケツ掘られて相当気持ち良かったんすねえ」

「どうやってそれを……、それはなんで……」

「フツーに出回ってる裏動画っすよ。最初はよく似た別人かと思ったんですけど、どうやら本物みたいだ」

「もう……、やめてくれ。俺にはもう金も家族もプライドも、何もない……」

安藤は俯き、震える拳を握りしめた。

「お前にしたことなら謝る。本当に悪かったと思ってる……」

「あのー、いや。そんなつもりじゃないんすよ。そりゃあまあの時はイヤだったけど」

「それなら、なんだ……？そんなものを見せつけて……」

陰惨な目つきで顔を上げた安藤を見て、森田は動画を止めると、ニヤリとわらった。

「あれから、俺、男もイケるようになって」
「……だから、俺にお前をヤレって？」
「違う違う。俺がお前のケツ掘るんだよ♡」
　チャックを下ろすと、森田の前からぼるんっと大きなものが飛び出した。
「あれ以来、あんたみたいな身体もチンコもでけえ男を掘るのが性癖になっちまって、いいずりネタねーかなって裏サイト漁ってたら見つけたのがコレだったんだよ」
「も、森田……っ」
「……しゃぶってよ」
　頭を押さえられ、フロアに膝をついた。突き出されたペニスは怒ったように血管を浮き立たせている。
「しゃぶれよ♡おらっ、口開けろ♡」
「んぶっ……♡む……っ♡んおぉっ♡」
　強引に入ってきた肉の棒が口の中で暴れ回る。むわぁとしたオスの臭いに安藤の思考が支配されそうになる。
　ぬろんっと口から抜けたかと思うと、呆然とする安藤の頬をびたんっと打った。
「ハメるから、下脱いでケツ出せや♡」

「そ、それは……」
「ヤダって言うなら、過去のこと全部あんたの家族にぶちまけるぞ？」
びたんっとまた頬を往復して打たれた。
屈辱に耐えながら安藤はなんとか立ち上がって、スラックスを脱いだ。下着を足首までおろすと、森田の非情な命令が聞こえた。
「手をついて、こっちにケツつき出せ♡」
「……うぅ」
安藤は言われるがまま、壁に手をついた。乾いた笑いがして、パシッと尻を叩かれる。
「もっとつき出せや♡腰引いてんじゃねえぞっ♡ケツハメお願いしますって言え♡」
「……ケツハメ、お願いしま、す」
ぐいっと腰を反らせるように突き出した尻肉に森田のペニスが押しつけられた。

第三話『先輩に騙されてアナルマッサージを受けたノンケリーマンの末路』

美人施術師×チョロいノンケリーマン
性感マッサージ・美形攻め・快楽堕ち

爽輔（そうすけ）は、人生をクソだと思いかけていた。
繁忙期を過ぎたはずなのに、毎日朝から晩まで仕事ばかり。プライベートの時間はほんどない。そのせいでカノジョにはフラれるし、趣味のフットサルにも顔を出せず、ストレスと性欲が溜まる一方だった。
諸先輩方はどうやって乗り越えているのか気になって、気の置けない先輩、清田に相談すると、風俗に誘われた。
だが、爽輔はあっさり断った。
「あー、俺フーゾク未経験なんですよ。イヤなんすよ。だってなんか怖くないすか。知らないヒトとするっていうのがどうも…」
「じゃあ今までどうしてたんだよ？」
「カノジョとすればいいじゃないですか」
端正な顔立ちの爽輔は、学生時代から続けてきたスポーツのお陰でスタイルもよく、これまでカノジョが途切れたことはない。
だから自慰もほとんどしたことがない、と言うと清田にジト目で睨まれた。
「な、なんでですか。清田先輩だって、身体デカいし、男らしくてカッコイイじゃないです

か」
「お前は何もわかってないようだな」
　清田は懐から取り出したチラシを爽輔に押しつけた。
「そんなお前にピッタリの店を紹介してやろう。いわゆる知り合いがやってる店なんだ。だから安心していい。清潔だし、なんならオシャレだ」
「確かに」
　チラシに載った店内の雰囲気は、おしゃれでナチュラルなマッサージ店といった様子で、住所が性風俗店が建ち並ぶ繁華街でなければ、そうとは気づかない。
　清田は、スマホのバーコードを読み取って、施術師のひとりを見せた。
「お前こういう子が好みだろ？」
　透明感のある美人が柔らかな微笑を浮かべている。名前はイオリ、らしい。
　爽輔はおもわず身を乗り出した。
「えぇっ、こんな綺麗な人がしてくれるんですか？！」
「本物はもっと美人だぞ。でも人気があるから初見はいきなり予約できない。だが俺の知り合いだから、頼んでやらんこともないが…」
「お願いします！なんでもしますから！」

「…お前ホントチョロいよな。コース内容はおまかせになるがいいか？」
「いいです！大丈夫です！」
食い気味に拝み倒して、その日のうちに店を予約することができた。もちろんイオリ指名である。
モチベーションが高まり、ホクホクで仕事を切り上げると、爽輔は何ヶ月かぶりに定時で会社をあがった。向かった先は、マッサージ店のある繁華街だった。

＊

そのマッサージ店は、繁華街の雑居ビルの二階にあった。
店名だけのシンプルな看板に本当にここで合っているのかドキドキしながら中に入ると、スムースジャズとアロマの香りのする明るい店内に戸惑った。店内には数名の男性がいて、リラックスした様子だ。
清田に指示された通り受付で名前を告げると、すぐに奥のVIPルームへ通された。
イオリがくるまで、少し時間がかかるらしい。
シャワーブースで汗を流すと、爽輔はバスローブ一枚を羽織って、さりげなくサイドテー

ブルに用意されていたスムージーを飲んだ。美味い。
（…これが風俗なのか？）
ソファに座ったまま、ぐるりと室内を見回す。
清潔そうな寝台とソファの他に家具はなく、ここでもアロマの良い匂いがした。置かれたマッサージメニューを見ても、ごく当たり前で性の匂いはしない。
自分が想像していた風俗店のイメージとはだいぶ違うなあ、などと呑気に考えていると、静かにドアが開いた。
「お待たせしました。担当させていただくイオリです。本日はよろしくお願いします」
清田の言った通り、イオリは実物のほうが綺麗だった。スラリと背が高く色白でモデル風の美人だ。
「清田さんからお話は伺っております」
「あ、どうも。よろしくお願いします…」
ニコッと微笑まれて、爽輔はごくりと喉が鳴った。これからこの美人にエッチなマッサージを…と思うと、ワクワクとドキドキが止まらない。
イオリは寝台の傍らに何やらボトルを用意しながら、愛想よく話かけてくる。
「こういったマッサージをご利用されるのは初めてだそうですね」

「そうなんです。全然、なにもわかっていなくて」
「そういう方も多いんですよ。こちらはお預かりしますね」
　背後にまわったイオリにふわりとバスローブを脱がされた。寒くはないが、いきなり全裸になった気恥しさで爽輔はやや前屈みになった。
「空調の温度はこれくらいで大丈夫ですか？」
「あ、はい。大丈夫です…」
「ちょっと緊張しますよね。少し明かりを落としましょうか」
　イオリが少し照明を暗くすると、いよいよムードが高まってきた。爽輔の緊張をほぐすように、イオリは愛想よく話しかけてくれる。
「実は清田さんとは高校の同級生なんですよ。ずっと仲良くしてくれる悪友なんです。」
「えっ、じゃあ…」
「ふふ。何歳に見えます？」
　美人に妖しく微笑まれて、爽輔は耳を赤くした。
「……そんなの関係ないですよ」
「ありがとうございます。年上だからって断られたらどうしようかと思いました」
「歳とかどうでもよくて、イオリさん、めちゃくちゃ綺麗ですよ」

「そんなに褒めてくださるなんて嬉しいです。今日は、安心してお任せくださいね♡さあ、こちらへどうぞ」
　優しく手のひらで背中を押されて、爽輔は寝台へと移動する。
「仰向け、ですか？」
「ええ。お好きな格好で大丈夫ですよ。気になるようでしたら股間はタオルで隠します」
「あ、はい…」
　優しく導かれて爽輔は仰向けに寝そべった。腰の下にクッションが敷いてあり、自然と股間を上に突き出すような体勢になる。
　タオルが載せられた自分の股間を見つめながら、
（…隠してるほうが余計にヤラシイかも）
などと考えていると、薄いビニール手袋を着けたイオリがニコニコしながら両手を掲げた。
「では、アナル開発の特別コースを施術させていただきますね♡」
「えっ、あ、アナル開発…？！」
　驚く爽輔の脚をさっきの嫋やかさとは打って変わった腕力でM字開脚させると、イオリはにっこりと微笑んだ。その力の強さに戸惑いながらイオリの股間に目をやると、はっきりと男の証である膨らみがある。爽輔はぎょっとした。

「えっ…、おとこ…？」
「そうですよ。ここ、ゲイ男性専用マッサージ店ですから♡」
「そ、そんな…、初めて聞いたんですけど？！」
「はい、清田さんから事情は伺ってます♡」
イオリはニコニコしながら、爽輔の膝の間に顔を埋めた。
「ノンケのアナルをわからせるのは得意なので安心してください♡終わる頃には前も後ろもトロトロにさせちゃいますよ♡」
「ちょっ？！あっえっ待ってそんな…、俺そんなこと知らなかっ…！？」
清田に騙された――――と気づくと同時に、にゅるっと生温い感覚が尻の穴に触れた。
「んあ…ッ？！」
むちっとした尻肉に鼻先を埋めるようにして、イオリがアナルを舐ってくる。皺を撫でるようにクルクルと周りをくすぐられ、思わず力が抜けたところを、すかさず尖らせた舌でこじ開けられた。
ぬるぬるとした舌で粘膜を犯される感覚に、爽輔は熱いため息をついた。

第四話『電車でケツイキ！ガチムチリーマンの悲劇』

モブ複数×正義感が強いガチムチリーマン
複数・痴漢電車・メスイキ・快楽堕ち

いつもはもう一本後の電車に乗る町田がその時刻のその車両に乗り込んだのは、自分が痴漢に遭うわけなどないと信じていたからだ。
アイドルみたいにかわいい後輩の鈴木から「痴漢されるのがイヤだが、電車を変えるわけにもいかず困っている」と聞いて、それなら俺が一緒に乗ってその卑劣な痴漢どもをいっちょ捻ってやろうと思ったのだ。

鈴木がいつも乗っているという電車は、通勤ラッシュの最も混みあっている時間帯で、人がすし詰め状態だった。
（うへえ、地方なのにこんなに混んでんのかよ～…）
既にウンザリしながら、しばらく開かない進行方向右側のドアの前に立つ。後ろも両サイドも人人人で、人いきれがする。正義感で乗り込んできたものの、ほとんどの人が痴漢などしないただの通勤客なわけで、体の大きな自分が余計な場所をとっていることに気

が咎めた。町田は胸に鞄を抱きしめて、できるだけ実を縮めた。
鈴木は町田がひどい目に遭うんじゃないかとしきりに心配してくれたが、ガタイがよく、短髪で、年中日に焼けている自分はいかにも男臭い。
（俺のケツに興味があるヤツなんざいねえだろう）
鈴木が乗ってくるのは次の駅である。それまでにどうやって目星をつけてやろうかと考えを巡らせたところで、尻の辺りに違和感を覚えた。さっきから何か硬いものがぐりぐり当たっているなとは思っていたが、気のせいではなかった。
電車の揺れに合わせてさりげなく当たっていたソレが今は明らかな意図を持って、尻の谷間を目がけてグイグイ押しつけられている。
（いやいやいやいや、マジかよ？）
驚きと半笑いで振り返ろうとしたとき、男の手で軽く尻肉を掴まれた。
怒りがこみ上げたが、目的を思い出して冷静になる。おびき出さなくとも、向こうから来てくれるのなら、ありがたいではないか。
（……このゲス野郎が）
その手はしばらく手のひらで包み込むようにして町田の尻の感触を楽しんでいたが、抵抗しないとわかると、大胆な触り方をし始めた。張りのある感触を味わうようにぎゅっと

掴み、尻肉に指を食い込ませてから、弾かれるように離す。
その手つきは明らかに性的で、町田に快感を与えようとしているのがわかった。
（なんだこの触り方…、なんでこんな…）
尻を揉みこむいやらしい手つきに少し体が熱くなってきた。ずっとスポーツ一筋で恋愛経験は少なく、鍛えあげられた自分の体を性的な目的で触れられたことなど、一度もない。鈴木には内緒だが童貞だ。
スラックスの上から優しく尻を撫で回したかと思うと、掴みあげて強く揉みしだかれ、深いため息が出た。
（くそっ。なんで、俺は感じてるんだ…）
町田は顔を伏せて、男の指使いに耐えた。抵抗しようにも混みあっていてもう体勢を変えられない。ドアに上半身を押しつけて、少し突き出した尻を痴漢野郎は好き勝手に弄んでいる。
（なんでこんなことされて…。抵抗しねえと…）
掴んだ尻肉を左右に割り広げられて、横に伸びた尻穴がヒクついた。そこを男の指がぐっと突く。
「おっ…♡」

思わず声が出てしまい、町田は慌てて口を引き結んだ。その声に調子を良くしたのか、痴漢の指がスラックス越しにアナルを攻めはじめた。ぐりぐりとねじ込んだり、ズンズンと突かれて、下着がだんだんとアナルに食い込んできた。

いつの間にか町田は勃起していた。

（なんで…？！気づかれたらまずい…）

焦ったが、時すでに遅し。伸びてきた手が股間を掴み、竿を擦りあげるようにねっとりと揉む。男を知る男の手つきだ。

「おっ…、ん…っ♡」

初めて味わう他人の手の感触に、町田は敏感に反応してしまった。しかもよく見れば、アナルを突いてくる痴漢とはまた別の手ではないか。

（何人いるんだよ…っ？！）

股間を揉む手が伸びてきた方向に目をやったが、どの人もみな伏し目がちに立っているだけだ。その間も痴漢の攻めの手は止まらない。むしろ、激しくなってきた。

「おぉ…♡お…っ♡」

三本目の手が町田の股間に手を回してきたのだ。陰嚢を揉みあげる手つきに射精感が高まる。

（くそっ…、気持ちいい…）

唇を噛んで、町田は目を閉じて耐えた。しかし痴漢たちの手練手管で攻められれば、童貞の町田などひとたまりもなかった。

「んっ…、ふ…ぅ…♡」

ぐにぐにっ♡ごりゅごりゅっ♡

いきなり亀頭の裏側をごしごしと扱かれて、堪えていた射精感が一気に弾けた。

「ん、ぉんっ…♡」

痴漢に背中から抱かれるようにして、パンツの中で射精してしまった。どろりとしたいやな感触が太腿を伝っていく。

「ハァ…っ、ハァ…っ」

（くそっ、イかされちまった…）

ちょうど駅に到着して、痴漢たちの手は何事もなかったかのように町田を解放した。反対のドアが開き、なだれ込む人の流れで車内がざわざわする。

「……。」

羞恥心のあまり顔を伏せていた町田は気がつかなかった。乗り合わせた周りの乗客がその様子をねっとりとした視線で舐めまわしていることを。

第五話『プレゼントとしてヤンデレな甥にアナルを奪われた叔父の包容力』

ヤンデレ美形な甥（大学生）×独身ノンケ叔父

ショタおじ・酔姦・ハピエン

「誕生日プレゼントは、敦くんがいい」

最初は何を言っているのか理解できなかった。

ファミレスのテーブルで向き合って座る凜人に、敦は「なんだって？」と聞き返した。

「だから、誕生日には敦くんが欲しい」

ツーブロックヘアの切りそろえた長い前髪の下から綺麗な瞳が上目遣いにこちらを見ている。

「ずっと、好きだったんだ。だから敦くんが欲しい」

「本気で言ってんのか？」

「本気」

凜人はそう言って、小鳥のようにちまちまとアイスクリームを食べた。長すぎる袖。不

思議な髪の色。三十路でずっとスポーツ一筋だった敦には理解できない凜人の二十歳の誕生日プレゼント。下手になにかを買うよりは一緒に買いに行った方がいいと思って、連れ出した結果がこれだった。

いつも来るファミレスの喧騒が敦にはどこか遠く感じた。何をどう理解していいのか、どう答えるべきかわからず固まっていると、デザート用の薄いスプーンで凜人がアイスグラスを叩いた。

「来週末だよ。ママもばーちゃんも夜勤って言ってたし、ピザとって、好きなもんいっぱい食いてーな」

「あ、あぁ、そうだな。そうしようか……」

「せっかくだし、酒が飲みたい。敦くんも付き合ってくれるんでしょ」

「そりゃあもちろん付き合うさ。かわいい甥っ子の誕生日なんだからな」

敦はようやく口元をゆるませた。ほっとしたと言っていいかもしれない。ときどき凜人の言動にはドキリとさせられるが、考えすぎだと自分に言い聞かせた。好きと言うのは、家族的な意味に違いない。どこの世界に冴えない中年男に恋愛感情を抱く二十歳がいるというのだ。仕事はただのサラリーマンだし、見た目も、ガタイはいいがそれだけで、とりたてて顔がいいわけでもない。

「あー、楽しみだな」
そう言って、凜人がにこりと唇を笑わせた。誰に似たのか色白の綺麗な顔立ちは三日月のように美しい。
思えば、凜人は幼少期から美しい子どもだった。
離婚した姉がまだ赤ん坊だった凜人を連れて実家に帰ってきてから、もう二十年が過ぎたのだと思うと、感慨深い。
「凜人が二十歳か。そりゃ俺も歳をとるよなあ……」
「年齢は関係ないよ。でも、ホントに感謝してる」
凜人が少し照れ臭そうに言った。その様子に敦は安堵した。いい子になってくれたな、そう思って胸がじんとした。
誕生日プレゼントに自分が欲しい、というのは、凜人なりの表現だったに違いない。週末は、好きなだけピザを注文して、酒に付き合ってやろう。
敦はそう考えて、全ての言葉を家族らしいものとして解釈した。

＊

「歳を取るのは、おめでたいことだね」
凜人は、眠っている敦を見下ろして、目を細めた。弧を描いた薄い唇には妙に色気がある。敦は気のせいにしたが（そしてそれは想定内だが）、凜人は幼少期から敦のことが好きだ。敦のことしか見ていない。
敦を叔父さんとか、子どもの頃のように兄ちゃんと呼ばなくなったのは、この狂おしいほどの愛着心が家族に向ける情愛ではなく、極めて性的な恋愛対象としてのものだと自覚しているからだ。
凜人は母親の実家に、看護士の祖母と母、叔父でサラリーマンの敦と同居している。敦は独身で恋人がいる気配はない。母や祖母は、学生時代から水球一筋で、いまだにその頃の仲間とばかりつるんでばかりで、色気のある噂のひとつもない敦を心配しているようだ。
それは凜人にとって好都合だった。
「敦くん？」
返事はない。敦はベッドの上で仰向けに寝ている。暑いのかパンツ一丁だし、そのパンツも半分ズレていた。どうやって古臭い体育会系社会を生き抜いてきたのか心配になるくらい、敦はアルコールに弱かった。
普段はまったく飲まないが、今日は〝かわいい甥っ子〟の誕生日のお祝いにと酒に付き合っ

てくれたのだ。たしか、缶ビールを二本。
（俺はアルコールなんて、ほんと、なんでもないんだけど…）
チューハイを飲んだが、凜人の白いうりざね顔は平然としている。まあ少し体がぽかぽかするくらいだろうか。
テレビを見ながらうとうとし始めた敦に、ベッドで寝たらどう？と促すところまで、計画通りだ。敦は「悪いな」とかむにゃむにゃ言いながら、凜人に背を押されて二階の自室に戻るなり、ベッドへ倒れ込んだ。暑いといって上も下も脱いでしまったのは、想定外だった。
寝息を立てる敦を見下ろして、凜人は知らず息があがった。
（大好きな敦くん……）
ベッドに上がって、その逞しい体に跨った。三十をもうとっくに過ぎている、だが鍛えた人のどっしりとした身体つき。凜人は割れた腹を撫で、その胸に両手を這わせた。脂肪の詰まったむっちりとした胸を揉みしだくと、興奮で自身が硬くなってきた。
凜人はゆっくりと腹筋から下腹部へと舌で舐めおろし、下着のなかに収まった敦の竿に触れた。見たことがないわけではない。が、こんな風に欲望を持って触れるのは初めてだ。
（敦くんのちんちん、見たい……）
凜人が下着を脱がせると、濃い陰毛の中からしおれたペニスが顔を出した。大人の、ま

してや敦のペニスに凜人は興奮して、その赤黒い先端をぱくりと咥えた。鈴口を縦になぞるように舌先で抉ったり、亀頭をキャンディのように口内で舐めまわす。

「んふっ……んっ……」

敦の先端からはカウパーが溢れてきて、その粘ついた舌触りに凜人は歓喜した。

（俺の口でもっと感じて欲しい……）

尿と汗とそれからザーメンの混じったような雄臭さに凜人は夢中でしゃぶった。

頭は敦とセックスすることでいっぱいだ。

第六話『好きなヤツのオナホに転生した俺が見た天国と地獄』

幼なじみの男子学生 × オナホに転生したヤンキー

とにかくアホエロ・ハピエン

こりゃひでえ。これは死んだ。俺、死んだわ。ここは交通事故現場なんだけどね、今まさにそう言う悲惨な状況よ。詳細は割愛させていただきますね。あーあ死んだ。死んだわ俺。死ぬってどんなものかと思ってたけどなんてことはねえな。人間の死亡率がヒャクパー

だってことくらい、偏差値2のど底辺高校に通う俺だって知ってる。しゃーねえしゃーねえ。こんな人生もうどうでもいいさ。残念だけど死んだらもうしかたねえわ。ハイ次行ってみよ〜。

あ？どこ行くのって次だよ、次。次あるでしょ。俺は解脱した覚えなんかありませんよ。とっとと次行かせろよ。めんどくせーんだよ。俺は待つのが大嫌いなんだ。テメー獄卒だかなんだか知らねえが早くしねえとその金棒ぶんどって三途の川にぶち込むぞコラ。

——おっ、話がわかりそうなのが来たじゃねえか。なになに。さっそく俺を生まれ変わらせてくれるって？ちゃーんとこの契約書に目を通して決めろって？へえへえわかりましたよ。生きても死んでも役人てのはめんどくせえやつらばっかだなあ。

ふーん、このままだと南極のオキアミに転生か地獄の針山行きだが、俺が前前前前前前前世に積んだ徳と御先祖様の積んだ徳をすべて併せて使えば今すぐ大人の玩具に生まれ変わることができます、と。大人は読めるけど玩具が読めねえな。おとなのもとぐ？げんぐ？まあいいや。アホほど徳消費すんだし、オキアミや地獄の針山よりはマシだろ。はーい、こっちにします！俺、大人のもとぐに生まれ変わりまーす！！

あう。さみい……。目を開けたら吹きっさらしのベランダの景色が見えた。ざけんじゃ

ねえぞ。誰が吹きっさらしのベランダに俺を放置してんだ。ぶっころすぞ。俺は体を起こそうとした、けど体が動かねえ。動かねえっつうか、なんか変だ。転がることならできそうな気がして右側に肩を倒すと（感覚）、目の前の窓ガラスに映った自分？に驚愕した。

オナホじゃねえか！！！！黒のデンガじゃねえか！！！なんだよこれ！！！！おとなのもとぐってデンガのことかよ！！！！てゆーか洗って再利用してんじゃねえか！！！！高校生かよ！！！！俺もしてたけど！！！！！

そこまで吠えたところで窓が開いて、男の手が上から伸びてきた。顔は見えない。色白で指の長い手。知っている手だ。人差し指にほくろがあって、それで――。

「だめだ、あんまり乾いてないや」

ひえええええええええええええええい！！！

俺は天地がひっくり返るような声で叫んだ。なぜって！その声の持ち主は！俺の天使！俺の愛！俺の世界！マイエンジェルスイートハート！アパートのお隣に住む幼馴染の薫だったからだ！

かおる！俺だよ！なあきこえねえのかよ！かおる！かおる！かおる！かおる！かーおー

る―！

俺は力の限り叫び続けた。しかし俺の体の振動は薫には伝わらない。ぐにぐに揺れるだけだ。

「あとは中で乾かせばいっか」

薫はどうやら使用済みデンガを水洗いし、ベランダの室外機の上で乾かしていたらしい。まあそのデンガが俺とは知らないわけだが、室内へ戻れるのはありがたい。なにしろ俺は真っ裸。だってオナホだもの。

――次の瞬間、俺は薫と見つめあっていた。

いや、薫はオナホが半乾きだなって見てるだけだろうけど、俺は薫という美の天使と見つめ合い、思わず硬くなった。オナホなのに。いやオナホだけに。

薫の白い肌。明るく輝く瞳。さらさらの髪。滑らかな頬。長くて細いまつ毛。すうっと通った鼻筋。いつも笑ったような唇。小さい頃から本当にきれいでかわいい薫。

そう、直毛の剛毛ゆえにスポーツ刈りか九分刈りしかできず、筋肉ダルマの、体もデカけりゃ態度もデカいヤンキーな俺とは全然違う、俺の天使。

ん?ちょっと待てよ、マイエンジェル。

俺、薫のオナホに転生したんだよな?えっ。　待って?じゃあ俺の体に薫のちんこが入ってくるっていうのか……?!

ドキドキドキドキドキドキドキドキドキドキドキドキドキ♡

俺はドキドキした。俺の中の空洞に、薫のちんこが入ってくると想像しただけで、ドキドキがわくわくして、止まらねえ。な、なんだこの初めての気持ち……。そんな趣味はなかったが、これがデンガの本能らしい。薫のちんこが俺のここに……。考えただけで空洞の内側がギュンギュンしちまう!

(あんっ、いくっ、いっちまうううう♡♡♡)

人間の体で言うとイきそうな感じがして俺はぶるっと震えた。ようやく薫もデンガ(俺)の様子がおかしいことに気がついたらしい。

ベッドに座り、デンガ(俺)を横にして中をグッと覗き込んでくる。

(やっ、やめろぉっ♡見るなあっ♡見ないでぇぇっ♡♡♡)

俺の入口にかかる薫の吐息にいちいち反応して、ピクピクしてしまう。今の俺は全身が性感帯らしい。

第七話『ゆうべはよくおやすみでしたね～ド変態淫魔の搾精旅籠』

淫魔→真面目で実直な騎士団長 ×？

睡眠姦・器具による搾精

突然だが、俺は淫魔だ。淫魔とは、寝ているときにやってきて、人間の精力を頂戴して生きる種族である。しかし俺はその行為にあまり関心がない。人間で例えるなら、食べられるならなんでもいいやって感じだろうか。むしろ、自分の精を人間に注ぎ込むことに興奮を覚えてしまう、淫魔としてはド変態である。

そんなこんなで淫魔の社会では肩身が狭いので、人間のふりをして人間社会で生きている。

俺が暮らしているのは、とある王国の港町。そこで主に船乗り相手の旅籠を経営している。

なけなしの金で買った宿は小さく古く、港からも中心街からも遠いのだが、とある理由から驚くほど繁盛していた。

理由↓この旅籠に泊まった男は天にも昇るようなエッチな夢を見られる。

て、わけだ。

最初の客は、遠国から寄港した船乗りのだった。ここに投宿している間、毎晩、美女と同衾するえも言われぬような気持ちのいい夢を見たその船乗り、それ以降、必ずうちに泊まるようになった。その船乗りから話を聞いた別の船乗りが来て泊まり、同じように淫夢を見ては常連になってくれた。

そうやって船乗りたちの間でクチコミで広まり、繁盛するようになったのである。ありがたい、ありがたい。

もちろん、冷やかしも来る。だが、まったく問題ない。翌朝には無言で帰っていくか、さもなくば常連になるだけだ。そりゃそうだ。あれは嘘でも夢でもなんでもない。実際に淫魔の俺がお客さんの精子を搾り取ってるんだもの。気持ちいいに決まってる。

旅籠は人間社会に馴染むための副業であって、俺の本業は、新鮮な精液を集めて淫魔の店に卸す搾精屋だ。

今や淫魔たちが暮らす魔界のスーパーでは店頭に新鮮な精液がミルクと称して並んでいる時代になった。若い淫魔の中には、多大な労力と時間を費やして人間と関わり合うより、スーパーでミルクを買ってすませる者も多いらしい。

まあ、俺も似たようなもんだが、いわゆる草食系淫魔が増えた。
お陰で上質な精液の需要は日々高まっていて、こちらの商売も上々である。
ミルク搾精用牧場なんてのもあるが、精液の質は人間のストレスに左右されるから、味はいまひとつらしい。
反面、俺の旅籠で搾精したミルクは長い船旅で溜まりに溜まった屈強な海の男たちが気持ちよく放った天然物。濃くてうまいと評判だ。夜のうちに搾った精液はただちに魔界のミルクタンクに転送され、搾りたて天然ミルクとして、意識高い系淫魔向けのオーガニックスーパーへ卸されている。
とまあそんな感じなのだが、最初に言った通り、俺の性癖は人間に自分の精を注ぎ込むこと。夢を見ていると思っているようだが、俺は好みの客には自分の精をたっぷり注ぎこませてもらっている。もちろん、客の望みの姿になっていい夢を見てもらいながら――。

＊

歴戦の勇士、男の中の男、三十代のまさに男盛りの若き騎士団長ジルが訪れたのは、とある時化の日の夕暮れだった。寄港する船もなく、聞こえるのは雨風と雷の音ばかり。町

外れの我が宿に客はおらず、俺は店の奥で帳面をつけていた。
ふいにドアベルの音が聞こえ、野太い声が玄関から聞こえた。
「ごめんください」
「はいはい、いらっしゃい」
俺は帳面を閉じると手近にあったタオルを手に取って玄関へ向かった。てっきり町の宿にあぶれた旅人だろうと思ったのだが、そこにいたのは泣く子も黙る、騎士団長だった。鴨居に届くような筋骨隆々とした大柄な男が、静かな面持ちで俺を見すえている。
(な、なんだ…?淫魔ってバレたとか?まさかな…)
日頃は呑気な俺もこれには緊張が走った。騎士団長殿がこんな場末の宿屋にどんな用があるというのだろう。あったとしたら、決していいことではない。
(しかしながら、美味そうな男だぜ…。)
淫魔だからつい値踏みしてしまう。
褐色の肌に短く刈り上げたグレーの髪。目鼻立ちは端正で、甘ささえ感じさせる眦の下がった優しい緑色の瞳。しかし肉体はバッキバキのマッチョというギャップがいい。雨に濡れたせいで体に張りついた服が胸の厚さや腰のくびれ、なにより股間の膨らみを強調していた。

（うーん体力ありそうだし、年齢も男盛りであそこもデカそうだから、よく搾れそうだな。というか、私服ってことは騎士団とは関係ないのか？）

「こちらのご主人か？」

ジルは声までいい。腹の底に響くような低音ボイスに、俺は揉み手をしながら頭を下げた。

「さようでございます。今日はお泊まりで？」

「ああ…。部屋は空いているかな」

「はい。生憎の天気でございますから、他にお泊まりのお客様はいらっしゃいません」

「そうか。それなら良かった」

ジルはタオルで濡れた身体を拭きながら温かい飲み物でも持ってこようと踵を返した俺を呼び止めた。

「ご主人、気遣いは無用だ」

「夕飯はお済みで？では、酒などご用意いたしましょうか？」

「よい」ジルは気まずそうに太い眉を下げた。「ああ、だからこういうコソコソしたことは性にあわぬのだ」

おっとっと、そりゃどういうことだ？

俺は、あくまで恭しくジルに向き直った。
「ひょっとすると、なにか騎士団の御用でいらっしゃったので？ジル様」
「やはりわかってしまうか……」
「他言はいたしません」
「うむ…」
頭をかいて、ジルは意外なほど率直に宿に訪れた理由を教えてくれた。
「実はな、アレン王太子殿下がこちらの夢の噂をお耳にされたのだ。どうしても泊まるといって聞かぬ。しかし、そういうわけにもいかぬゆえ、私が確かめにいくと言って納得していただいたのだ」
「はあ、なるほどそうでございましたか…」
アレン殿下というのは、この国の王子だ。その美貌と好色ぶりは、淫魔界でも名が轟いている。
ジルはそのアレン殿下の親衛隊長として常に傍らにいる。
それにしたって、本当にこんな宿屋の噂を確かめるためだけに来たんだとしたら、ジル騎士団長は噂通りの生真面目な人らしい。グッときた。ぜひ泊まっていってもらいたい。いい夢を見させてさしあげよう。

「確かにうちにお泊まりのお客様は皆様不思議なことをおっしゃいますが、ご覧の通り、なんの変哲もない宿屋とその主人でございます」
「うむ。そのようだな」
「しかしながら王太子殿下への土産話になりましょうし、せっかくですからお泊まりになってはいかがでしょうか。朝まで雨も風も止まぬようでございます」
「では、頼む」
「すぐにお部屋をご用意いたします」
スキップしたい気持ちを抑え、俺は早足で待合室を出た。二階に駆け上がり、一番広い部屋のシーツを整え、ベッドの下にある搾精用の様々な器具を確認した。搾精屋が軌道に乗ったので、より効率よく搾精するための道具を新規導入したのだ。それを騎士団長で試すつもりだ。
ウキウキしながら階下に降りると、ジルはすっかりリラックスして、こぢんまりしたい宿だな、などと言って笑顔を見せた。
俺も胡散臭い笑みを返しながら、（気持ちいい夢を見せてあげますからね）などと内心大興奮した。

第八話『淫紋に堕ちた聖騎士』

敵国の魔導士 × 敗北した聖騎士

淫紋・触手搾精・快楽堕ち・ハピエン

戦場にはそぐわない官能的な光景だった。

聖騎士であるナイトハルトは鎧を脱ぎ、鍛えあげられた裸身を晴天の下に晒して、エーリッヒとの決闘のためペニスを振り立てていた。

この世界には古来より、神の化身である牡牛がツノを突き合わせて戦うことに由来し、男根と男根を突き合わせて決闘する風習がある。決闘としてはもっとも名誉あるものであり、アナルに相手の男根を挿入されれば敗者となり、その身は勝者のものとなる。

ナイトハルトは決闘に敗けたことはない。鍛え上げられた肉体とその雄々しいツノで、常に相手を屈服させてきた。

今度の相手は魔導士エーリッヒである。魔導の道では巧みらしいが、ナイトハルトより細身で陰惨な雰囲気の男。勝てぬわけがない、という慢心が一瞬の油断を生んだ。

ぬりゅっ…！

交差する竿と竿が滑りふと目を離した瞬間、エーリッヒの手のひらがナイトハルトの下腹部に押しつけられた。手のひらからは重く暗いエネルギーがほとばしり、下腹部には不思議な紋様が浮かび上がった。淫紋である。

「んッ……！」

ナイトハルトの体が疼き、疼きは熱に変わる。信じられないことに、アナルからはとろとろと蜜液が溢れ始めた。

「んぐう……っ」

ナイトハルトは、歯を食いしばって絶頂に至るのを堪えている。彼に邪淫の術を施した敵国の魔導士エーリッヒは、憎しみに満ちた残忍な目でその痴態を不躾に眺めた。

「ぐあ…っ！あぁっ…！熱いぃ…っ！」

ナイトハルトのペニスは痛々しいほどに勃起し、脈動している。股間を押さえて前のめりになるその背中に、エーリッヒは跨った。不敵な笑みを浮かべると、うつ伏せのナイトハルトの尻を開くなり一気に己の剛直を突き立てた。

「おぉおお……っ！おごォ…っ！おッ！お…ッ！」

片手で背を押さえつけたまま、彼の部下である騎士たちが見ている前で激しく抜き差しする。肉ひだがエーリッヒの竿に吸いつき、ナイトハルトの尻が跳ねた。体に下敷きにさ

れたペニスからは精液が漏れて、大地を白濁で汚していく。
「おおッ…おぐッ…ほおッ……お……」
ナイトハルトがエーリッヒに敗北してしまった。
太陽のごとき常勝の騎士と呼ばれたナイトハルトが、闇の魔導士に負けてしまった事実に、みな、凍りついて誰も何も言えない。
ナイトハルトの喘ぎ声以外には風の音もなく、戦場は静まり返っていた。
ぐぽっ！ぐぽっ！ぐぽっ！
エーリッヒはこれまでの恨みや屈辱を込めて腰を振り抜くと、その最奥で精液を放った。
「うぐぅ…っ」
ナイトハルトが悔しげに目尻に涙をうかべた。

第九話『聖騎士の蜜穴調教』

蜜穴調教師 × 誇り高き聖騎士

軽い調教・性玩具・射精管理・快楽堕ち

聖騎士ヴァンサンは絶望していた。夜も昼もなく尻穴に男根を打ち込まれながらも脳裏に浮かぶのは愛しい婚約者、マリアンヌのことばかり。

（ああ、マリアンヌ……！）

朦朧としながら、夢見るように思い出す美しく優しい婚約者の顔。もう一度、貴女に会いたい。会って、愛していると伝えたい。

しかし身体をかけ上る快楽によって、夢想は壊れ、非情な現実に引き戻されてしまった。

両腕を後ろに引かれたヴァンサンのアナルをペニスがゴリュンッ♡と突き上げた。赤く腫れ上がるほどに昂ったヴァンサンのペニスが跳ね上がった。

「んおッ……♡ほお……ッ♡」

地獄のような快楽とはこのことに違いなかった。蜜穴調教などと言って尻穴を犯され、屈辱と怒りで胸がちぎれそうなのに、体だけは蕩けるほどに気持ちがいい。

しかし射精が許されるのは一日に一度だけ。さんざん尻を嬲られたあと、お願いをしなければこの苦しみを放つことすらできなかった。

容赦なくアナルを往復する男根にヴァンサンは髪を振り乱して、懇願した。

「やめろっ、やめてくれぇ…っ♡なんでもするからっ♡もう、イカせてくれ…♡」

するとよくやく股間の紐がゆるめられ、その瞬間、抑圧されていた精液が噴き出した。

「んほおぉーー〜ッ…♡♡♡」

喉から迸る自分のものとは思えぬ下品な喘ぎ声。暴力のような快感に襲われて、ヴァンサンは全身ををわななかせて絶頂した。

第十話『淫魔払いと称してえっちなことをされる純朴剣士』

モブ複数 × 純朴な剣士・神官 × 剣士

複数・性玩具・変態プレイ多め・ハピエン

冒険者ヴュステは、懊悩していた。

一人前の剣士になるべく故郷を出て、はや一年。世間に猛者と呼ばれる冒険者は多く、駆け出しの自分などまだまだひよっこだが、ギルドで共にクエストに行かないか？と声をかけられることも増えた。

最初は単純に能力を認められたのだと喜んでいたのだが、どうやらそれだけではないらしい。昨夜、そのことをはっきり自覚した。

長期クエストからの帰還だった。久しぶりに本拠地に戻り、酒場でパーティーの仲間た

ちと祝杯をあげた。リーダー格の神官と、青白い顔の魔法使い、真面目な武闘家、前の街からヴュステと帯同している戦士、それから剣士ヴュステの五人である。全員ギルドで紹介されて初めて見知った者同士だが、この冒険を通じて親しくなった。

大柄で逞しい肉体を持つヴュステだが、実はとても人見知りで大人しい青年である。幼少期は今よりコミュニケーションが苦手で、断られるかもしれないと思うと友達に遊ぼうと声をかけられないほど、内気だった。

だから学校が終わると、かつて冒険者だった父から剣を習い、素振りをして、ひとりで過ごすことが多かった。

そのお陰で今があるのだから、人生に無駄などないというのは真実だと思う。思うが、やっぱり納得がいかない。

昨夜、五人で祝杯をあげた後、武闘家に部屋で飲み直さないか？と誘われた。彼は武闘家らしく礼儀正しく物静かな人だった。大人しいヴュステを見下したり、威張ったりしない。人知れず黙々と鍛錬する姿を見て自分と似たものを感じ、もしかしたら友達になれるかも、と淡い期待を抱いて武闘家の泊まる部屋へと連れ立ったのだが――。部屋に入るなりキスをされ、股間をまさぐられた。

珍しく酔っているんですね、などと言ってさりげなくごまかそうとしたが、武闘家は「酔っ

てない」と答えた。その瞳は獲物を狙う豹のように抜け目なかった。
「あんたのこと、ずっといいなと思ってたんだ」
「ごめんなさい！！！」
逃げ出すように、部屋を出た。
とりあえず、同じ酒場の二階にある自室に飛び込んだものの、暗澹たる気持ちになった。
いつもこうだった。
友達になれると思ったら、相手は自分に欲望を抱いている。
（なぜなんだ……）
ベッドに腰かけ、頭を抱えた。

ヴュステが育ったのは、ここから遥か北にある辺境の村である。
質実剛健な父と、優しく信心深い母、少し年下の弟の四人家族。人より家畜の数の方が多いような田舎で、人々はみんなよく働き、信心深かった。
冒険者になって街に来て初めて、ヴュステは自分たちの暮らしがいかに素朴で信仰的だったかを知った。街の人はあまり神殿に通わないし、日々の祈りは寝る前くらいで、神官は

聖都から派遣された老神官がひとりいるだけだ。
自然とヴュステも神殿から足が遠のいてしまったが、今も朝のお祈りは欠かさないし、悪霊や目に見えない脅威を信じていた。三つ子の魂百までという。
（ひょっとしたら、俺には何か悪いものが憑いているんじゃないか……）
武闘家のことで、疑念が強くなった。
昔からヴュステは、男にモテた。貴賤老少問わず、とにかくモテた。彼らはみなヴュステに恋をし、欲望を抱く。一生の思い出にするから、一度だけでいいから、と跪いて懇願されたこともある。
なぜ、自分が。
ヴュステにはわからない。鏡に映る自分はパッとしない若僧である。
それにヴュステ自身まだ恋を知らなかった。
好きという気持ちは知っている。
でもそれは花や月を愛でる博愛や、家族に向ける情愛に由来する。恋のような、相手を想って眠れない夜も知らなければ、跪いてでも相手と一夜の契りを結び、それを永遠の思い出にして生きたいというような情熱も感じたことがない。
（初めてのキス、だったなあ……）

自分の唇に指で触れたが、なんの感慨もない。
せっかく自分なんかを好きになってくれたのに、応えられないことが申しわけない……。
とりあえずわかることは、経験上、こんな時は相手と物理的に距離を置いた方が良い、ということだ。お互い目に入れば嫌でも相手のことを考えてしまう。
ヴュステは手早く室内の荷物をまとめて皮袋に押し込むと、肩に担いで部屋を出た。これを機会にして、次の街へと旅立とう。
階段を駆け下り、帳場を覗き込んだ。よく見知ったご主人に声をかけた。夜は魔物も多いし明日にすれば？と引き止められたが何とか言いくるめ、銀貨を手渡した。慌ただしく酒場を出ようとしたところで、神官に肩を叩かれた。
「夜遅くに忙しないな」
「……すみません」
ヴュステが足元に下ろした皮袋を一瞥し、神官は「何かあったのか？」と聞いた。
神官は熟練の冒険者で、ヴュステよりひと回りほど年上だ。ぎょろりとした理知的な黒い瞳で見られると、何もかも白状したくなってしまう、とヴュステが恐る恐る打ち明けたときは、口を開けて大笑いしていた。それからずっとヴュステはこの神官を慕っている。聖職者の割に堅くなく、世慣れた冒険者らしい剽悍とした風情に憧れていた。信頼もしていた。

声をかけられたのも、運命かもしれない。
そんな風に受け取って、良くしてくれた人に黙って去るよりは、一度、相談してみることにした。

＊

剣士・ヴュステ。二十を一つ二つでたばかりの栗毛の若者。乳白色の逞しい肉体とはにかんだような笑顔のアンバランスさが魅力的で、密かに絶大な人気がある。実力も才能も充分あるのに、なぜか自信がなく、臆病なところが却って好ましく思われていた。
ヴュステを狙う男たちは多い。しかしそのほとんどが手を出せないか、片想いに終始する。
なぜなら、ヴュステがあまりにも純朴だからである。
好きだと告白すれば小鳥のように逃げ去ってしまうし、かと言ってそれらしく声をかけても、さりげなく太腿を撫でても、そうとは気づかない。堪らなくなって、あけすけに「一晩だけ」などと拝んでも、もちろん小鳥は逃げ去るのである。
いつの間にか、ヴュステは誰にも手を出せない聖域だ、という妙な共有意識がギルドの

中に生まれていた。
しかし、武闘家のように諦めきれない人たちもまだいるし、ヴュステが知らないだけで神官も魔法使いも戦士もまた同類だった。

相談場所は、ヴュステの希望で酒場の二階ではなく、神官が滞在している巡礼者の宿泊施設になった。武闘家と顔を合わせるのは気まずすぎる。
神殿の敷地内に併設されている宿泊施設は、清潔で簡素だった。ベッドと丸椅子がひとつ、置いてあるのみである。
勧められるがまま、ヴュステは大きな肩を縮めるようにベッドに座った。
魑魅魍魎が跋扈する現代、荒野を歩いて巡礼する者も絶えて久しく、いま宿泊しているのは神官のみだという。
「正神官殿は神殿の奥でおやすみだ。耳が遠いし、足が悪いから、私が燈の番をして回る」
そう話しながら手渡されたカップから、薬草茶の良い香りがした。
「ありがとうございます……」
「少しは落ち着いたかな」
神官らしく言い、彼は少し離れた場所に丸椅子を置いて腰掛けた。

両手の中にカップを包み込んで、ヴュステは水面を見つめた。罪を告白するときのように静かな声でありのままを話した――。

「――――こんなことがあったんです。武闘家さんからそんなことをされるとは夢にも思っていなくて」

ヴュステの声はいよいよ暗くなる。

「でも、思い返せば、子供の頃からずっとこんな感じだったんです。みんな、他の人には友達らしく接していて、俺にだってそうだったはずなのに、急に……、その……、俺を、よ、欲望の目で見るんです。俺にはそんなつもりはまったくなかったのに……」

ヴュステの話を聞き終わると、神官はしばらく考えたあと、こう言った。

「それは、淫魔の仕業かもしれないな」

「淫魔ですって？」

ヴュステは驚いた。

「おとぎ話でしか聞いたことがありません。そんな昔の魔物がまだ存在するのですか？」

「するとも。姿形のない魔性のモヤのようなもので、前の大戦のとき消された古代悪鬼の吐いた最期の息とも言われている」

神官は顎に手を当て考え深げにした。
「モヤゆえ、寝ている人の尻から出入りして、知らぬうちに憑く。憑かれると、無意識に男を誘惑するフェロモンを放ち、性行為によって相手の精気を吸いとる」
「そんな恐ろしいものが――」
古代悪鬼。姿形を持たない魔性。死に至らしめる。どれもが繊細なヴュステにはひどく恐ろしく聞こえた。
「つまり俺が周りの人達を淫らな気持ちにさせてしまっている、ということですよね……」
「君ではなく、君に憑いた淫魔だ。憑いたものは祓えばよい」
「……その手立てをご存知なのですね？！」
うなずく神官に、ヴュステは希望を感じた。
これまでのことが自分のせいだったと思うとつらいが、逆に言えば自分のことならどうとでもできる。
「神官さま、俺、できることならなんでもします！淫魔を祓っていただけないでしょうか？！」
「しかし、少し特殊な方法だ。君に耐えられるかどうか……」
「耐えてみせます！」
「そうか……」

ゆらりと神官がヴュステの前に立った。その黒い長衣の股間が雄々しく膨らんでいる。カッと頬が熱くなって、目を伏せた。
「聖職者である私ですら、君と二人きりになれば、こんな風になってしまうのだ。いわんや武闘家をや」
「し……、知らなかったのです。お許しを…」
「では教えよう」
神官はヴュステの隣に座ると、その豊満な肉体をぴったりと覆うアンダーシャツの上からその胸の突起を摘んだ。
「あッ♡神官さま、なにをなさいます……ッ？！」
「厚く逞しい剣士の肉体だ。それなのに……、淫魔が取り憑いているからこのように感じてしまう」
「あぁッ……♡」
神官は硬く主張しはじめたヴュステの乳首を爪弾いたり、粒をグニュリと押し潰した。
「服の上からこの突起を弄られただけで感じてしまうことが、何よりの証拠だ」
「あッ♡」
ピンッと弾かれて、ヴュステは甘い声をあげた。

否定したいのだが、神官の言う通り、ヴュステは張り詰めていた。苦しい股間を神官の手のひらが撫でさする。
「……苦しそうだな。淫魔はすでに腹の奥まで入り込んでしまっている」
「はぁっ……、はぁ……っ」
荒い息が胸をせりあがる。神官の指が前紐をほどくのを、ただ見つめている。ズボンを下げて飛び出したペニスは、すでに固く尖り、蕾のように透明の蜜をこぼしている。
「はぁッ……、見ないでください……っ、こんな、こんなの違うんです……っ♡あぁっ……♡」
コリコリと乳首をいじられて、腰がうごめいた。気持ちよさで頭がいっぱいになる。
ヴュステは泣きそうだった。
「神官さま……っ♡もうどうしたらいいかわかりません……っ♡」
「淫魔祓いを始めようか。覚悟はいいかな？」
ヴュステは涙目で小さく何度も頷いた。
「は、はやく、はやく楽にしてください……っ♡俺のこの淫らな体をどうか鎮めてください……っ♡」
「うむ……。では私が吸い出してやろうな」

アンダーシャツをたくし上げた神官が荒々しくヴュステの乳首に吸いついた。
ぢゅううう♡ぢゅるるるっ♡
わざとらしく音を立てては、突起を甘噛みしたり、舌でれろれろと転がす。吸っていないほうは、忙しなく指で捏ねられた。
「はぁっ♡んあぁっ♡神官さま……ぁ♡」
「はしたない声を出しおって……。本格的に淫魔が食らいついているようだな……。ああ、この淫らな肉棒はどうしたことだ？」
あっさりと皮を剥かれ、現れたピンク色の亀頭を神官のギラついた視線が犯す。
「乳首がだめなら、ここから吸い出すしかあるまいッ」
神官の吐息が粘膜に触れたかと思うと、あっという間にその口の中に吸い込まれた。
「あッッ♡あッ♡おーーー……ッ♡♡♡」
ぢゅぽっぢゅぽっ♡ぢゅるるるっ♡れろれろれろれろれろ♡ぢゅぅううぅ〜〜♡ぢゅぽっ♡ぢゅぽっ♡ぢゅぽっ♡
想像より激しく容赦ない口淫にヴュステは、なすすべもなく声を震わせた。竿を下から上に舐め上げ、敏感な先端をキャンディーでも舐めるように舌でなぶられた。根元まで咥えられ陰嚢を揉みしだかれて、ヴュステは悩ましげに身悶えした。

（気持ちいい……っ♡♡♡）

尻肉を掴んでいる神官の指先が、さりげなくヴュステの後ろの穴を狙っている。ねだるように周りを撫でまわされて、キュッとキツく閉じると、前を吸われてしまい、むしろだらしなく広がった。

瞬間、神官の指が深く侵入した。

「あはぁ……ッ♡ゆ、ゆびがはいってきます……っ♡♡」

くいくいと指が天井を叩くたび、ヴュステは自分では触れたことのない膨らみを圧されて、戸惑ったように声を上げた。

「ふぅンッ♡んおっ♡ほぉォ……っ♡神官さま……っ♡」

「この奥に淫魔が潜んでいる……。ほら私の指をうまそうに食んでいるぞ……♡」

「ぁん……っ♡♡あぁ……ッ♡」

「ずいぶん気持ちよさそうじゃないか……。こんな淫らな穴には、精液を注ぎ込むしかあるまいな」

「せ、せいえき……♡」

「精液は精気の塊。男同士の交わりは生殖を伴わぬゆえに聖なる力を持つ。その力を体内に潜む淫魔にくれてやるのだ」

体液でぬれた口周りを長衣の袖で拭い、神官はヴュステに跪くように命じた。別段、深く考えることもなく、ヴュステは神官の足元に跪いた。信心深い故郷ではそうするのが当たり前だったからだ。

「まずは上からだ。さあ」

長衣の裾を捲りあげ、ヴュステのものとは比べものにならない巨大なペニスを突きつけられた。

筋肉、或いはガチムチ
オリジナル BL 短編集①サンプル

著者名　かりのくうき
発行日　2022 年 12 月 11 日
連絡先　auringonkukka-odennu@yahoo.co.jp

無断転載・改変を禁じます。